文学の杜

仙台文学館友の会会報

第66号
令和3年7月30日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話　022(271)3020
仙台文学館のホームページ
https://www.sendai-lit.jp/

2021年度スタート

総会は、今年度も中止

仙台市に「まん延防止等重点措置」が適用されたことを受け、仙台文学館が5月11日まで臨時休館になったため、2021年度友の会総会を、5月4日に予定していたが、昨年度に続き、中止となった。2020年度の事業報告、収支決算報告、監査報告、2021年度事業予定案、予算案については、事務局が資料を作成し、役員が確認した後に、全会員に送付し、総会に代えることになった。

2021年度は、感染対策をして可能な範囲で友の会事業を開催していこうと役員会で話し合われた。例年、初夏に開催していた施設見学会の代替案として、文学館講習室を会場に朗読と音楽を味わうイベントが企画された。また、冬に開催している友の会講座は、文学館の学芸員に依頼し、常設展示室内の解説を聴く講座の開催案が出されている。

なお、役員、サポーターは次の方々。

▽会長　渡辺祥子▽副会長　寺嶋信▽幹事　一文字ひろみ、尾形光子▽監事　近田裕子、長沼和子▽サポーター　池田ミチ、加藤裕子、坂田久子、佐藤満子、佐野のぶ▽事務局　伊藤美菜子

もうひとつの世界

会長　渡辺　祥子

皆さま、お元気でいらっしゃいますでしょうか？

新年度を迎えたものの、この春も新型ウイルスの状況がなかなか落ち着かず、昨年に続いて総会を開催できず残念に思っております。しかしながら、いや、だからこそ、こうして会報を通してご挨拶が出来ますこと、友の会という場で皆さまとつながっていられることが、いつも以上に有難く思えてきます。

先日、友の会行事としては約2年ぶりとなる主催行事（写真家・星野道夫さんのエッセイの朗読会）を開催することが出来ました（報告は2頁）。そこで朗読した文章の中に、「人間にとって大切なふたつの自然」の存在への言及がありました。ひとつは日々の暮らしの中で関わる身近な自然。そしてもうひとつは、遥か遠い自然（例えば日本から見たアラスカなど）です。「例えそこに行けなくとも、そこにあると思うだけで心が豊かになる自然の存在は、私たちに想像力という豊かさを与えてくれる」とありました。

この言葉に触れながら私は、「もうひとつの遥か遠い自然」が私たちにもたらすものは、「文学」がもたらすものと重なると思いました。日々の生活の中で繰り広げられる現実と時を同じくして、もうひとつの大きな世界の存在を想像できただけで、私たちは息苦しい現実だけにとらわれず、そこから少し距離を取り、本当の意味での自分を生きられると思うのです。

大変な今だからこそ、文学との関りをさらに大切にし、皆さま方と共に歩んでいきたいと、改めて思いました。今年度も引き続き、どうぞ宜しくお願い致します。

文友一滴

突然「苛む」という言葉が浮かんできた。普段使う言葉ではない。愚痴をこぼさない友人がグチる。腰を痛めた、家族が体調を崩した、果てはこのご時世の必需品であるパソコンの調子がおかしい、周りから様々な不調が聞こえてきた。そして、そういえば自分の調子も低迷しているなと気付いたのだ。毎年、苦手な季節の年中行事と割り切って、適当にサボってやり過ごしていた。それが今年は低迷期間が長期化していた。これが1年以上続く「自粛」の影響なのか。のんきに自粛生活を楽しんでいたつもりだったけれど、案外影響を受けていたのだ。「コロナ鬱」などという言葉には惑わされないぞと、友人たちも気を張って過ごしていたのだろう。それが今、いろいろな形で表に出てきたのだ。ウイルスとは苛むものだったのだ。「もうコロナのことばっかり」とニュースを消したとき、震災後にテレビも見なくなって表情が無くなった父を思い出した。これはイケない。活を入れて仕切り直そう。気持ちを切り替えるときに、私はヤカンを磨く。鏡を磨く。終わる頃には気持ちがスッキリと落ち着いてくる。そうすると本が読みたくなったり、何か作りたくなったりするのだ。単純と言えば単純なのだが、効果てきめんなのだ。

うかうか鬱々と過ごしているうちに、ヤマボウシはすっかり散っていた。街路樹は若葉が茂り、夏を迎える準備を整えている。根元ではオオバコが葉を広げ、スズメノカタビラの茎が伸びている。ウグイスは鳴き方を習得して、ホトトギスと掛け合いをしている。

苛むものとは戯わず、赦してしまおう。肩を揺すって首を回して、手も足もブラブラさせて、縮こまった体を解そう。風通しをよくしよう。そうしてコロナ禍という言葉の呪縛から解き放たれよう。（和）

私と郷土と文学 ㉕

だいぶ前になるが、日経新聞に辺見庸の「馬のなかの夜と港」の題でコラムが載っていた。それによると辺見庸は馬の幻影と、立ちのぼるにおいがいつも鼻孔にはあると。私は一九四三年、辺見庸は一九四四年生まれ。私がひとつ年上で東日本大震災で被害をうけ廃校になった門脇小学校、中学校の先輩、後輩である。といっても芥川賞作家として世に出るまでは、辺見庸のことは知らなかった。彼の書く文章には私の記憶にある原風景がよく出てくる。海辺の情景、狂女のはなし、馬のはなし。海は、ひばりの海岸といわれ小学校では授業として泳ぎに行っていたが、津波になる前から砂浜がなくなり泳ぐことが出来なくなっていた。松林を抜けると広い砂浜となり、幼児の頃には草競馬があり友達のお母さんに連れられ見にいった記憶がある。馬が砂浜で

辺見庸そして、ふるさと

松の木につながれ砂を足で蹴っていた。海のそばの南地という町には遊郭があった。私の家は山の上だったので小学校への登校は坂を下り、下校のときは坂をのぼらなければならなかった。山の斜面は墓地。坂の途中、蛇神様という小さな社があり枝ぶりのよい大きな木があった。なんの木だったかおぼえていないがその木で首つり自殺をする人がいてこわかった。社に手を合わせ拝んでいると木にぶらぶらした足がありびっくりして腰をぬかした人がいたとか。辺見庸の家は南地の近くだったそうで通学に蛇神様は通らなかったはず、それで蛇神様を書いたものは読んだことがない。

（菊地長子）

「私と郷土と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

文友の部屋

✻月曜日、Eテレ放送の「100分de名著」をよく見るが、放送とは別にNHK出版から出ている別冊版も興味深い。先日読んだのが『大乗仏教～こうしてブッダの教えは変容した』で、ブッダの元々の教えと、大乗仏教の違い、誕生の経緯や日本仏教の各宗派の考え方など、仏教全体の構図、考え方がスッキリと理解できた。是非ご一読を。（T・H）

✻アカデミー賞映画「ノマドランド」を観た。夫の死後、家を失った女性がキャンピングカーで旅する話。アメリカには様々な事情で移動生活をしているシニアがいると知った。広大な自然美の一方で、アマゾンの配送工場や農場で働き、休憩地で物々交換する場面など、現実の厳しさが伝わる。家と老いについて考えさせられた。（H・K）

訃報　海鋒博美さん

会員の海鋒博美さんが令和3年6月6日に逝去されました。

海鋒さんには、平成29年10月に開催した友の会文学散歩で、文学館敷地内にある「海鋒義美音楽碑」に関するお話をしていただきました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。合掌

風と歩こう ⑮

Photo by Ryuji Sasaki

バンーすごい音がした。熊よけ葉っぱ爆弾だという。なんとそれは一枚の緑の葉っぱ〝イタドリ〟で鳴らした音。五感をいっぱい使って歩きましょうと北根の森へ入った。

その日は文学館の企画展イベント。空は青く梅雨に入る前のこの時期が一番素敵だ。幾種類もの緑がキラキラしている。鳥の鳴き声が聞こえる。空も飛ぶ鳥も植物も、わかる人と一緒に歩くのは楽しい。たとえすぐに忘れるとしても。

全員マスクをつけての森歩き。表情は見えないけれど目が笑っていた。外の空気がおいしいと体全体が喜びに満ちていた。さっそく森林インストラクターさんは足元の小さな花を取り上げ解説してくれる。雑草にもすべて名前がついているのだ。しゃがんで見入る。「ヨモギとトリカブトは間違えやすいから気を付けて」にはびっくり。この前、草摘みをしたばかりだったので。ややしばらく歩くと、よく茶花に使われる山野草に出くわした。風にそよいでいる緑の中にいたら心も清々しくなって、休んでいたお茶のお稽古を始めたいなと思った。（一）

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第66号をお届けします。

▽コロナ禍の規制で泊りがけの旅は自粛した。泉ヶ岳、定義山、秋保温泉、松島、登米。何度行っても発見がある。新しい食事処や小さな喫茶店。勝負神社なんてあったかしら。瑞巌寺は正面から入りたい。宝物殿でイスカの銘がつく茶碗にでくわした。おかえりモネの宣伝で活気を感じる登米もよかった。（一）

▽馴染みの植木屋さんに庭木の剪定を頼んだ。作業の終盤、木蓮の枝にヒヨドリの巣をみつけた植木屋さん、巣の周りの枝を切った後だから親鳥はもう帰らないだろう、庭の巣は幸運のしるしなのに悪かった、と言い残して帰った。梅雨の晴れ間の小さくて大きな出来事。（近）

▽パルテノン神殿は東が正面で、キリスト教の教会は祭壇が東にあるそうだ。どちらも日の出を意識してのことらしい。中国や日本では「天子は南面す」と言うよねと思った。平城京も紫禁城も、伊勢神宮も東大寺の大仏も正面は南だ。シルクロードのどこかで、正面の方角が変わったらしい。（和）

▽83歳の俳優アンソニー・ポプキンス主演の映画『ファーザー』を観た。現実と妄想の間を行き来する老いた父親と、それを支える娘の苦悩を独特の切り口で映し出す。老優の演技、特に目の表情がみごとだ。ラストシーンで、介護士の腕の中に彼は何を悟ったのか。人生の終末の、苦しくも切ない作品である。（佐）

友の会イベント　朗読とギターで奏でる星野道夫の世界

悠久の時を旅する

新型コロナウイルスの収束が見通せない中、今年度も友の会行事が開催できない状況となっています。例年夏に実施してきた「施設見学会」も見送りとなりました。そこで友の会の行事として朗読会を開催することになりました。文学館の展示「写真展　星野道夫　悠久の時を旅する」に呼応するかたちです。星野道夫の数あるエッセイ集の中から選んだ5作品を、渡辺祥子会長が彼の生き方をなぞるかのように朗読し、佐藤正隆氏の静かなギターの音色が、深い余韻を生み出しました。

ジョージ・モーブリーが空撮したアラスカの写真に魅了されてアラスカ行きを決意し、それを実行した20歳の夏休みから、アラスカは彼の人生になりました。

ヒグマもクジラも、今自分の生きている同じ時間の流れの中に居るのだという地続きの感覚を得ることも、カリブーの大群に本物の野生を見て太古の気配を感じることも、めぐる季節の中で人は育まれ、希望を持つのだと知ることも、一瞬の夏に咲く岩陰のワスレナグサに「生きるのは今」と悟ったのも、アラスカに生きようと決めた彼の、自然への畏敬があったからこそ得られたものだったように思います。

世界地図を広げると、星野の暮らしたアラスカと、彼が取材中の事故で急逝したカムチャツカは、極北のベーリング海を挟んで位置しています。北の海は彼が生きた濃密な時間を、悠久の時の中にそっと包み込んでいるのかも知れません。

6月15日開催　30名参加（佐）

参加会員からの感想

◇朗読の声が物語を奏で、ギターはそれを決してじゃますることなく、時に静寂さえも溶け合っていた。言葉とギターと客席のアンサンブル。そして初夏の風に抱かれた緑の文学館。まろやかなギターの音色と静かな朗読の流れ。一気にアラスカの地へ降り立った。心地の良い質の高い時間の流れを贅沢にたっぷりといただいた。こんな気持ちは本当に久しぶりのことだった。参加して良かった。

（伊藤まつ子）

◇「星野道夫さんって、ヒグマに襲われた人？」正直言って今までそのくらいの認識しか無かった。しかし展示を見て、写真集で見るのとはまったく違う迫力に圧倒され、魅了された。そして今回の美しい音楽と朗読を聞いて、その文章の奥深さに気づかされた。（本は読んでいたはずなのに）「私たちが生きることができるのは、過去でも未来でもなく、ただ今しかない」この言葉が心に残った。

（星佐都子）

◇渡辺さんの抑揚の効いた語りと佐藤さんの優しい風のようなギターが紡いだ、初夏の昼下がりの素敵なひと時でした。星野道夫氏の作品の大ファンとおっしゃる渡辺さんのお声は、まるでご本人がそこにいて語っているように熱を帯びていて、先に鑑賞した写真展の作品の数々が鮮やかに思い浮かびました。星野氏の魂が、愛してやまなかった大自然を私たちの心に再現してくれたようでした。

（櫻庭郁子）

◇広大な自然、大地につつまれ生きる。そこには過酷な現実もあり夢のような生活ではないかもしれないが。すべてをなげ棄てアラスカ、世界へと旅立ちたくなった。これから何年生きられるだろう。星野さんは早く亡くなられたが私達の経験することの出来ない自然との関わりをもった。結果ではなくすごした時間。朗読もすばらしく夢心地だった。最後に忘れな草をあなたにをギターできけたらと。

（K・T）

◇「人生はからくりに満ちている」と作者自身は人生を語る。エスキモー村の長との出会いから熊との事故で亡くなる16年間のほとんどは、アラスカの生命の存在を写真と随筆に残した。その随筆集から五作品と、作者のテーマ「身近な自然とはるかに遠い想像の自然」をギターと朗読で楽しませてくれた。演奏が終ると沢山の拍手が湧き上がった。コロナ禍にも拘らずさわやかな初夏の一日だった。

（佐藤太朗）

◇この三月で退職し、念願だった友の会に入会いたしました。初めてのイベントは星野道夫さんの世界。素晴らしい渡辺先生の朗読と佐藤正隆さんのギターの調べに、ひととき私は遥かなアラスカの大地に誘われました。悠久の時の中で共に生きているという思いに、帰り道の草花や風が愛しくてなりませんでした。

（遠藤敦子）

◇星野道夫のエッセイが好きだ。声が聞こえてくる。美声ではないけれど、穏やかで心地よい。その声でアラスカの自然を、日常を語る。そう感じていた。その文章が女性の声で朗読された。知っている世界に違う光が差し込んだようだった。あるいはギターの響きが星野道夫の世界で、声が変化する光だったのかもしれない。そして解放された窓からは、自粛生活へのご褒美が届いた。

（K）

第48回読書会

心を込めて代筆いたします

小川糸『ツバキ文具店』　夏・秋編

ツバキ文具店は鎌倉の山側にあるちいさな文房具店である。先代の祖母から店主を引き継いだのはポッポちゃんこと雨宮鳩子。独身の若い女性である。この文房具店は、実は江戸時代から続く「代書屋」でもあった。求めに応じてその人の代わりに手紙を書く仕事である。

物語は、自分では書くことのできない理由を持つ人の心に寄り添い、最善の手紙を書くために誠意を尽くす鳩子の生活を、鎌倉の自然や風景と共に優しい語り口でふんわりと温かく、懐かしく、描き出す。

手紙の依頼は様々である。結婚式に出席してくれた人達への離婚の報告、可愛がっていたペットの猿を亡くした友人へのお悔み、結ばれなかった昔の恋人への思いやり、借金申し込みへの断り、悪筆の女性が届けたい義母へのお祝いなど…そこには手紙にまつわるひとりひとりの特別な物語があった。

依頼人の思いを確実に届けるために、便箋や封筒の材質、ペンの種類、インクの色、文字の形、切手のデザインなど、全てのことに細心の注意を払う鳩子。彼女の仕事を通して、読み手は人にふみを書く時の心構えを知ることになる。

参加者には鎌倉を知る人が多く、場所の特定がなされたり、鎌倉の土地柄についての話が出たりした。「手紙の礼儀に気付かされた。手紙は人生そのものだと実感した。手紙の力に改めて思い至った」などの感想があった。また本のページに付いている小さな絵や、手紙毎の文字の違いなどを楽しんだという声も出された。全体として、登場する人々の人間関係の良さを挙げ、現代の生活では得難い温かさに共感する感想が多い。読みやすく、楽しく、そして柔らかなものが胸に落ちる物語である。

6月9日　7名出席。　（佐）

次回読書会は10月13日㈭14時
小川糸『ツバキ文具店』（幻冬舎文庫）
冬・春編
※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。

第24回ことばの祭典

「ことばの祭典」は仙台文学館開館前年（1998年）のプレ企画からスタートし、これまで、毎年、短歌・俳句・川柳の合同吟行会を行ってきた。友の会としても協力として名を連ね、サポーター会員が、当日裏方を手伝うなど参加してきた。しかし、昨年予定していた第23回は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となった。

第24回を迎えた今年は、開催方法を変更し、事前応募のかたちで作品を募集したところ、全国41都道府県から、500名にのぼる参加をいただき、短歌の部302作品、俳句の部346作品、川柳の部297作品が寄せられた。

題は「海」または「潮」。選者は、短歌の部が伊藤一彦氏、梶原さい子氏、俳句の部が寺井谷子氏、高野ムツオ氏、川柳の部が小島蘭幸氏、雫石隆子氏、館長賞として佐伯一麦館長も三部門の選考にあたった。賞はことばの祭典賞、選者の特選・秀逸・佳作。佐伯一麦館長賞。

入賞作品は6月15日から7月9日まで、文学館1階エントランスロビーでパネル展示され、文学館ホームページでも紹介された。

《ことばの祭典賞》

◇短歌の部

心は帆かなしく広がる海原のことば受け止めようと生きれば

藤田恵里奈（群馬県伊勢崎市）

◇俳句の部

三月の海が溢れる仏壇に

鎌田京子（仙台市泉区）

◇川柳の部

君はまだ海辺に立ったままでいる

星出冬馬（島根県大田市）

《佐伯一麦館長賞》

◇短歌の部

漕ぎ出そう言葉集めの船旅へページをめくり活字の海へ

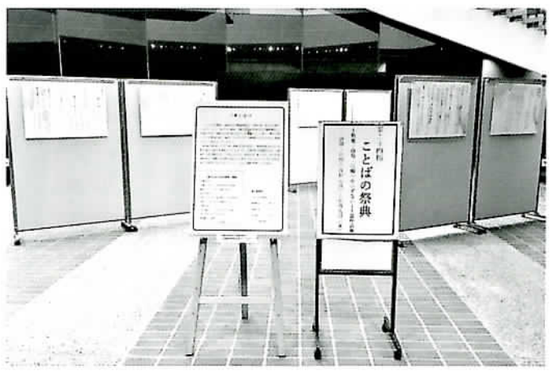
山内由樹（仙台市青葉区）

◇俳句の部

大海を知らぬ蛙が大欠伸

髙橋基（千葉県柏市）

◇川柳の部

赤潮や爺の自転車ギーコギコ

黒河内玉枝（宮城県名取市）